

『 和菓子の日 』

平安時代の西暦 848 年（承和15年・嘉祥元年）ご神託を受けた仁明天皇が、6月16日に「1」と「6」の数にちなんだお菓子や餅などを神前に供え、疫病退散や健康招福を祈り「嘉祥」と改元したという古例にちなみます。

「嘉祥」とは「めでたいしるし」であり、鎌倉時代には後の後嵯峨天皇が東宮となられる前に、6月16日に通貨16枚でお供えのお菓子などを求めて献じ、それを吉例とし、皇位継承後も続けられました。その後、室町時代の「嘉祥の日」には、朝廷で主上に「かづ」（「嘉祥の祝」の菓子のこと）を差し上げるのが吉例であったことが「御湯殿上日記」に記されています。

また「武徳編年集成・四十四」には、慶長のころ豊臣秀吉が「嘉祥の祝」を慣例として行っていたことが記されています。

江戸幕府においては、この日大広間で、将軍から諸士に、杉の葉を敷いた白木の片木の上に乗せたお菓子が配られたといひます。

（これを「嘉祥頂戴」という）

民間においては「嘉祥喰」といって銭十六文でお菓子や餅を16個求め、食べるしきたりがありました。

また、この夜に十六歳の袖止め（振袖をやめて詰め袖にする）「嘉祥縫」という風習があった他、6月16日に採った梅の実で作った梅干しを旅立ちの日に食べると災難を逃れるという「嘉祥の梅」の言い伝えもありました。

「嘉祥の祝」は、疫を逃れ、健康招福を願うめでたい行事として受け継がれ、明治時代まで盛んに行われていました。

この「嘉祥の日」が『和菓子の日』の起源とされています。